

石狩浜海浜植物保護センター調査研究報告第 12 号

石狩浜のハマボウフウの生育状況の地区別比較

2022 年 3 月

石狩浜海浜植物保護センター

石狩浜のハマボウフウの生育状況の地区別比較

内藤 華子（合同会社いしかり植物ラボ）・高橋 恵美（石狩浜海浜植物保護センター）

はじめに

ハマボウフウ (*Glehnia littoralis*) は、海岸砂地に適応して生育する植物で、全国の砂地海岸に分布するが、山菜としての過度な採取圧にさらされ、岩手県や秋田県では絶滅危惧種に指定されている（環境省生物多様性センターホームページ）。北海道では絶滅危惧種の指定はないものの、札幌近郊の石狩海岸では、1970年代以降、車の普及とともに海岸へハマボウフウ採取のために訪れるひとが激増し、数を著しく減らしたとされる（内藤, 2012）。現在は石狩市が1978年に設定した海浜植物等保護地区の河口地区では回復し、群生をみることができ（石狩浜海浜植物保護センター, 2012）。石狩市は2013年、海浜植物等保護地区として新たに弁天地区、親船地区を指定した（石狩浜海浜植物保護センター, 2013）。これらの地域でも、採取圧は減少していると思われる。

石狩川河口右岸地域は、左岸地域と同様の海浜環境が広がっており、ハマボウフウの大規模な自生地である（石狩浜海浜植物保護センター, 2009）。しかし、近年、山菜としての採取圧が高まっているとの声が聞かれる。

本調査では、今後、石狩海岸におけるハマボウフウの保全を考える上での基礎情報とするため、地区ごとにハマボウフウの生育状況を把握することを目的とした。

調査方法

図1に示す親船区、弁天区、聚富区のハマボウフウが生育する典型的な植生帯であるテンキグサ-コウボウムギ帯をそれぞれ0.98ha、0.96ha、2.35haを踏査し、すべてのハマボウフウの株の数と、そのうちの花茎を確認した繁殖株（図2-b）の数をカウントし、単位面積当たりの株数および株数当たりの繁殖株の割合を求めた。

また、部分的に一枚葉の当年発芽個体や2枚葉の発芽2~3年目の株の密生する箇所が見られた（図2-d.e.f）。これらについても、可能な限り株数をカウントするとともに、密生箇所の有無をエリアごとに記録した。

調査は、ハマボウフウの花茎が上がり始める6月下旬から開花する7月下旬の間の2回、延べ6時間、延べ12人で行った。

結果

ハマボウフウの1ha当たりの株数は、弁天区で最も多く、次いで親船区、聚富区だった。全株数に対する花茎をつけた株数の割合は、親船区が最も多く次いで弁天区、聚富区だった（表1）。

全体の株数に対する幼少株の定量化は、基準があいまいなまま調査したため困難となったが、有無の記録と定性的な目視によれば、弁天区、聚富区、親船区の順に多かった。



図1. 調査エリア

表 1. 調査エリア毎のハマボウフウ生育状況

| 調査エリア | 親船区 | 弁天区 | 聚富区 |
|-------------------|-------|--------|-------|
| 面積 (ha) | 0.98 | 0.96 | 2.35 |
| 株数 (株) | 946 | 1517 | 1534 |
| 繁殖株数 (株) | 879 | 1106 | 19 |
| 1ha 当たりの株数 (株/ha) | 968.7 | 1586.3 | 652.8 |
| 繁殖株割合 (%) | 92.9 | 72.9 | 1.23 |
| 幼少株密生地の有無 | 無 | 有 | 有 |

考察

弁天区では、生育株密度が高く、繁殖株の割合が高く、幼少株も数多く見られた。開花、結実、種子散布、発芽、定着といった更新が順調に進み、今後の個体群の維持も良好な状態にあると考えられる。旧来からの保護地区（河口地区）からの距離が近いこと、種子供給量が多く、H25 年以降保護区に指定され採取圧が減少したことなどが、理由として挙げられるだろう。

親船区では、株密度は 2 番目に高く、繁殖株の割合が最も高く、花を付けない株がほとんどない状態であった。幼少株の密生地も見られなかった。これは、開花はするが次世代が育っていない状態であると考えられ、今後の更新が十分にされない可能性がある。H25 以降保護地区指定されたため、採取圧が下がり個体数はある程度維持されている。しかし生育環境に注目すると、海側からは生育最適植生域の侵食、陸側からは光をめぐる競争等で生育が不利になるススキ群落が迫ってきている状況下にある。ススキの株中に飲み込まれながら草丈を高くしながら生育している株も多く見られた（図 2-c）。このような状況から、開花はするものの、実生が育つ環境が整っていない可能性が高い。保護区により株の採取圧は下がったものの、長期的には激減する可能性もある。

聚富区は、他の 2 地区に比べて株密度が最も低かった。あわせて、繁殖株の割合が低かった。ハマボウフウは、春先に採取されると、地下茎が残っていれば再度発芽してくる。しかし、植物生態学的には、本来 1 度の発芽にエネルギーを費やし成長するものが、採取により 2 度発芽にエネルギーを投資することになり、繁殖へ投資するエネルギーが不足して花を付けなくなる可能性が考えられる。

聚富区は海浜植物等保護地区の指定はなく、特に近年はハマボウフウ採取圧が高くなっているとの市民からの声も聞かれており、その影響は否定できない。一方で幼少株

も多く密生地が複数か所で確認されたことから、既存株の開花、結実、種子散布、発芽、の更新サイクルは現段階では維持されていると言える。今後、幼少株の消失や更新サイクルが途絶えることのないよう、注視していかなければならない。

謝辞

本調査にあたっては下記の方々にご協力いただいた。

江崎勇人、多田光義、成田一彦、若松隆、安田秀司（敬称略）

なお、本調査は、2018 年度石狩海浜植物保護センター受託事業調査研究として実施した。

引用文献

環境省生物多様性センターホームページ, 生物情報・収集・提供システムいきものログ「都道府県絶滅危惧種検索」. <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/pref>, (参照 2019.1.15)

内藤華子, 2012. 石狩市による石狩浜の環境保護の取り組み—行政の立場から. はまなす×いそこもりぐも@石狩浜. 藤女子大学人間生活学部.

石狩海浜植物保護センター, 2012. 石狩川河口部砂嘴における植生分布の変化. 石狩海浜植物保護センター調査研究報告, 10: 1-7.

石狩海浜植物保護センター, 2013. 石狩浜のすぐれた自然環境を次世代へつたえていくため海浜植物保護地区を拡大します. 通信はまぼうふう, 45:1.

石狩海浜植物保護センター, 2009. 聚富海岸の植生概況. 石狩海浜植物保護センター調査研究報告, 6: 1-63.



a. 繁殖サイズに達しているが花茎を付けていない株



b. 繁殖サイズに達して花茎を付けている株



c. 親船区で見られたススキの中に生える株



d. 繁殖サイズに達していない幼少株



e. 繁殖サイズに達していない幼少株の密生. 可能な限り株数をカウントした



f. 幼少株の中でも今年発芽したもの. これも可能な限りカウントした

図 2. カウントしたハマボウフウの株の状態